明治の女のフロンティア精神—マサとなつ

Rise of citizeness, Educator Masako Kagawa (1872-1953)
—What Girls Will Be?

山　田　通　夫*
Michio Yamada

はじめに

開学の祖、香川昌子（マサ、後に自ら昌子とした）は明治 37 年（1903）、山口県厚狭郡藤山村藤曲（現宇部市）に香川裁縫女塾として礎を築いた。平成 15 年（2003）、100 周年を迎えた。この間に一粒の種子は宇部フロンティア大学・大学院、宇部短期大学、香川高等学校、宇部短期大学付属中学校および、同付属藤山幼稚園を擁する学校法人香川学園へ成長発展した。開学 100 周年を機に学園内の有機的な組織の改変を行い、各学校はその名称に宇部フロンティア大学を冠に付けるよう校名の統一が図られ、香川学園の新しい世紀での次なる展開が大いに期待されている。

本稿は、これを記念して学園創立者である香川昌子の女流画家として、また教育者として生きた軌跡を辿ることを試みたものである。しかし、愛弟子上田芳江が「香川昌子伝」（1962）で述べているように、その女画家としての前半生についての記録はわずかしか残っていない。昌子は若き日の自らについて友人や知人に話すことはほとんどなく、後年の門下生などによる偉大な教育者としてのイメージのみが、全てを覆ってしまっているようである。

さて、昌子が四国で小学校の教師を目標に毎日を送っていた同じ歳月を、樋口一葉は士族の娘として、苦難の 24 年を東京で生きていた。260 年続いた徳川幕府が崩壊し、近代国家への道へ大きく舵を切った明治時代は、多くの矛盾を抱えながら、猛スピードで文明開化・富国強兵の道をつき進んだ。ともに士族の娘として、女性として、激動の時期を自分らしく生きるため、苦難の挑戦をした昌子と一葉をあらためて並列してみれば、時空を越えて、共通するものが少なくない。

1　小学校教師—香川昌子

香川昌子は当時の女性としては大柄で、頭髪のつややかで美しく、きめ細かな肌の持ち

---

* 宇部フロンティア大学人間社会学部 学部長

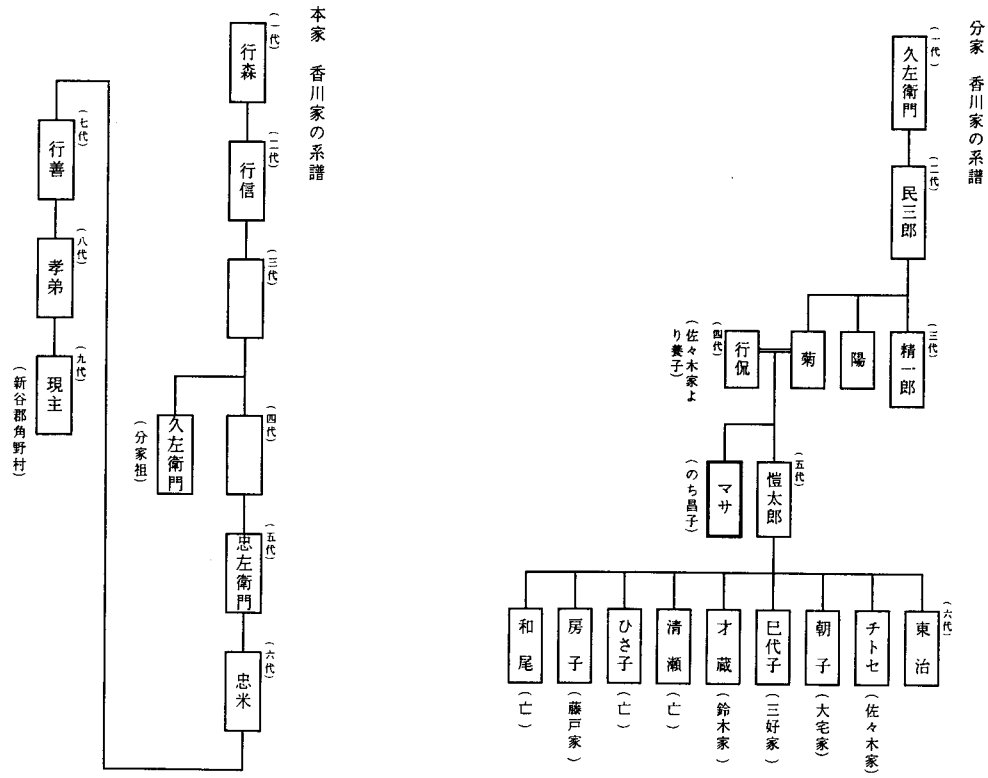
主であった。目元がさわやかで鼻筋が通り、しっかりした口元は才にたけ、意志の強さをあらわしている。そしてその指は細く長く、一見して芸術家としての感性の持ち主と思わせる。

彼女は明治5年1月1日（1872年）、愛媛県喜多郡新谷（にいや）村に父行侃（ゆきなお）、母菊の長女として生まれた。香川家は伊予大洲藩の分藩である新谷藩の家臣につらなる。

大洲藩の藩主加藤光泰は甲斐国二十四万石の領主であったが、関ヶ原では豊臣方についたために伯耆米子藩主を経て、大洲（六万石）へ移封されている。光泰の子貞泰は弟直泰に一万石を与え、新谷藩を立てた。

香川家の祖となる香川行森は藩主に従い、関ヶ原の合戦の後、甲斐より大洲、さらに新谷へ移り住むことになった。江戸幕府開府40年後の寛永20年（1643年）のことである。行森の曽孫の久左衛門は藩主のはからいで分家した。この分家の香川家が香川昌子につながる。

久左衛門の次男民三郎が分家の二代目を継ぐ。民三郎はすぐれた体格の持ち主で、陰日向なく忠実につかえたため藩主の信任も厚く、藩主の内帑と子女の教育にも当った。納戸頭にとりたてられ、参勤交代の役を何度か務めている。



民三郎の長男精一郎が三代目となる。しかし、文久3年、27歳で早世。長女の陽はすでに同藩の一柳家へ嫁いでおり、そこで次女菊に婿養子を迎え、四代目とした。

菊の夫、郷三郎（のち行侃）は西宇和郡宮内村の郷士、佐々木三郎太夫の三男である。

佐々木家は裕福な地主で、その三男に生まれ心豊かに育ち、その故か楽天的、開放的で磊落な気質の持ち主であった。後年、娘の学校で老先生として生徒に大層親しまれたという。

謹厳実直という香川家に共通の気質は兄愷太郎に色濃く、父親の開放的で行動的なところは妹昌子に受けつがれた。父は二人の子を自由な雰囲気のもとで育て、ともに激動の時代に最も必要とされる将来を見通す優れた予知能力と、判断力の持ち主に育て上げた。

昌子の生まれた新谷村は現在、大洲市と合併して、大洲市新谷区となっている。大洲市の町の中央を一級河川の肱川の清流が流れ、新谷区にはその支流の矢落川があり、肱川のほとりの丘の上には、大洲城天守閣が再現されて周囲の山と水にうまく調和している。新谷区は大洲市の中心から北方約 4km の山間に位置し、松山市より西の宇和島方面へむけて約 40 km 高速道路で約 30 分、容易に到達できるようになっている。とはいえ山の中、かつての藩の陣屋跡は、新谷小学校の校門そばの標識として残るばかり、この校庭に立つと南側に神南山、北側は和霊山が間近にそびえ、谷間の部落であることを実感させられる。この山と山の間を矢落川が流れ、それに平行して松山―宇和島街道が走っている。街道を松山方面に向かうと隣は内子町であり、反対に宇和島方面へ向かうと大洲市の市街地へ続いている。

米子より大洲の移封の際、藩主を慕って多くの商人たちも大洲へ移った。その影響か、今に残る城下町は四国の小京都と呼ばれる。新谷藩の藩校の立派なたたずまいを示す写真を見るにつけ、格別の特産物を持たなかったことが藩主の文教政策につながったのではと考える。明治に入り、旧藩士の多くは大阪や東京方面へと転出し、後年官界や貿易関係で、成功者を輩出していることは興味深い。

明治 6 年夏、香川家は、大洲の町を通り越し、夜昼峠の西に当たる八幡浜へ父行侃、母菊、養母ふさ、長男愷太郎、長女昌子の五人は一家をあげて移住した。

廃藩置県により石高200石以下の武士には禄高5年分相当の現金が支給されたという(秩禄処分)。時の政府の財政は高度に逼迫しており、大名などへは金禄公債を交付した。この時期を乗り越えることの可能であった大名などは後に華族へ転身することになるが、下級武士にはこの支給金も「焼け石に水」ほどのものでしかなかった。

因みに、古い宇部の藩主福原家（9000 石）の藩士は 137 戸で、廃藩置県後、その大半は農業（108 戸）に従事し、その他、商業、酒造業、紡績（各 2 戸）で医師が 6 戸であった。このうち生計に支障がないとされたものが 82 戸、生計困難が 55 戸であったとのデータがある〔宇部史編集委員会、1993：70〕。

香川家は八幡浜の郊外に落ち着き、行侃は私塾の師匠として、一家を支えることになる。

昌子は明治 11 年の春、小学校へ入学したと思われる。その当時、小学校は 8 年制であり、半年毎に昇級試験があった。明治 19 年、愛媛県西宇和郡八幡浜小学校を卒業した。上田芳江は「香川昌子伝」の中で 4 通りの履歴書を見出しているが、「履歴書の反古（4 通）を照会してみると、日付に若干の食いちがい」があることを指摘している。著者の手元にある宇部短期大学附属図書館所蔵の資料中に発見した履歴書は上田芳江の見たものであろ

うか。それとも5通目に当るものであろうか？

上田芳江の目にした4通の履歴書では、数え年15歳で明治19年3月八幡浜小学校卒業の年月だけは共通し、あとの事項での日付に微妙な差があるらしい〔上田、1962：201〕。

なお、香川家の系譜の原稿は昌子の兄愷太郎によるものである。この原稿のなかに、新谷を離れてからの香川家の動静については「神南懐旧録に詳記してある」との一節がある。「神南」は新谷の集落のすぐ南方にある山の名前である。愷太郎が晩年になり香川家の歴史を書き残したものと考えられるが、上田芳江は当時の香川家当主香川東治と「神南懐旧録」をくまなく探したが結局発見されなかったという。

前述の八幡浜小学校は、父行侃が家塾を開いた跡に建てられたものである。

明治17年春より、昌子は浅井錦江のもとで茶道、華道を学び、小学校卒業後、裁縫や手芸をも習い始めたが、手先が器用で上達も早かった。その後、大洲の西村静一郎塾で漢文、数学を学んでいる。それは、小学校の先生になるために必要であったものといわれる。八幡浜と大洲は約4里（16 km）離れ、往来には間にある海抜300 mの夜昼峠を越えなければならない。そこを毎日のように通い、明治20年9月、尋常小学校授業生の免許を取得し、晴れて小学校の先生になり、明治20年11月17日、西宇和郡宮内村の宮内小学校へ赴任した。宮内村は父行侃の生家である佐々木家がある。この佐々木家に寄宿して、宮内小学校へ通勤した。この小学校の明治20年分の綴じ込みの第1ページに香川マサの名前がある。昌子はその翌年（明治21年4月21日）、宮内村から更に西方の川之浜小学校に転任している。川之浜は、佐田岬半島のほぼ中ほど、その後、川之浜からさらに西方の四ツ浜小学校へ転任した。しかし、小学校赴任により塾は辞めたが、大洲通いは続いた。大洲にあった中野書店で青年男女の集まりがあり、ここで東京からの多くの情報が得られたからである。この頃になると欧米の古典などの翻訳書がつぎつぎと出版された。日本の中央での西洋文化流入による衝撃は、少し遅れて四国の小都市にも伝わってきはじめていたのである。

2　女流画家　芝香への道

芝香は昌子の画号である。画家になりたいとの思いはいつの頃からであったろうか。

南画の大家田能村直入が弟子の女流画家の信紅、橋本青江などとともに八幡浜にしばらく滞在するとの情報が中野書店に伝えられた。小さい時から画が好きで上手であった昌子は、橋本青江へ四国でお目にかかることはできないか、との手紙を出したという。

この頃、西村塾の西村静一郎の友人で、縁の人となる高山長幸に出会っている。

高山長幸は、大洲加藤藩の藩士の子である。父文兵衛は中小姓としてつかえていた。長幸は慶応3年生まれで、昌子より5歳年上である。

上田芳江によると、長幸は「端正な面、がっしりとした体躯、落ち着いた話し振り、高山青年のまわりにただよう雰囲気は、昌子が今まで見慣れたどの男性にもないものであった」〔上田、1962：31〕という。

彼は、中学校卒業後、小学校ついで中学校の教師となった。しかし、更なる教育の必要を感じた彼は明治19年（1886)、中学校教師をやめ、東京英語学校へ入り、翌年、慶応義塾に入学している。この間、彼の母は、上京に同行、共に生活をしている。

明治22年（1889)、慶応義塾を卒業すると、また大洲へ帰り、明治23年1月から喜多中学校に勤務、彼は中学教師であると同時に地元の小学教師へも働きかける情熱的な啓蒙家でもあった。まず雑誌「肱之友」を発行した。誌名に取った肱川は大洲の街中を流れる清流である。この「肱之友」発行には中野書店の女店主中野光子の大きな物心の協力があったという。同時に中野光子は画の才能の持ち主で美貌の昌子のよき理解者でもあった。

「肱之友」で首都東京と地方との文化の不平等、不均衡について、文化の中央集権を指摘し、「小学校教員に望む」との論説をかかげて地元の文化の向上のための教育の重要性をも説いた。小学校制度も次第に充実し、その成果が上がってきていたが、新しい教育が必要なのは子どもではなくて、むしろ親のほうではないかと、親の啓発に小学教師が当るべきであると説き動いた。

この長幸の真摯な熱意により、昌子の心の中に教育者としての自覚、中央への憧れと希望が生まれたのだろう。

しかし、現実には小学校を転任する度毎に、八幡浜や大洲の町から、より離れていくことにあせりを覚え、両親の反対を押しても、画業の道で自分らしく生きたいと煩悶が続く。八幡浜で女流画家青江と面会したことは、彼女の画業を通しての自己実現への思いをさらにつのらせることとなる。香川家には、昌子を画の修業のために経済的な援助をするだけのゆとりはなかった。そこを決心させたのは長幸と中野光子の援助であったと思われる。明治24年1月、ついに四ツ浜小学校を退職し、3月、大阪へ行き橋本青江の門下に入り、南画の修業を始める。

この半年後、長幸は郷里での活動及び中学校をやめて上京し、庚寅新詩社の記者となる。さらに、明治26年（1893）1月、三井銀行に就職、大阪支店に勤務することになった。ともに大阪での生活で、両人の接触が頻繁に行われたと推測される。

明治24年3月より約1年間、橋本青江門下となり、南画を学ぶ。ついで明治25年1月より約1年間、吉川留村に師事し、南画と漢文作詩を学ぶ。画のほかに漢文や作詩の勉強をすることは長幸の示唆による。明治26年3月より約2年間、藤田台石に南画を、近藤南洲より漢文作詩を学ぶ。明治28年（1895)、昌子は大阪から京都へ移り、ついに田能村直入が校主である京都南宗画学校へ入学した。直入が初代校長であった京都府画学校（明治13年設立、京都市立芸術大学の前身）では上村松園が学んでいる。同時に西田刺繍裁縫塾へも籍を置いている。

しかし、翌29年3月には、長幸が北海道函館の支店長として栄転することが決まった。

同年4月、長幸と昌子は函館の社宅で、高山の母を交えた家族3人の生活を始めた。2人が大洲ではじめて知り合い、一緒になるまで、8年の長い年月が経過していた。昌子25歳、長幸30歳のことである。1年余り続いた2人の生活のことについてはごく小数の親族

の間で記憶されているのみで、長幸が功成り名をとげ 71 歳で亡くなった後、やっと明らかとなった。長幸は財界での才能が認められ、のちに政友会代議士として党の総務を担当し、晩年は東洋拓殖株式会社総裁として重責を果たした。長幸とその母と昌子との生活に、森鴎外の母峰子と妻茂子のことが思い起こされる〔群、1999：9〕。

長幸の郷里、大洲の故老たちは、彼が函館で南画をよくする美貌の人と一緒に暮らしていたことを知っていた。長幸が後に東京に住むようになってから芝区三田網町の彼の屋敷を訪れた郷里の人たちに、彼の老母が昌子について「大きな女でたいそう絵が上手であった。長幸と昌子は大洲の中野書店の中野光子のところで知り合った」と語っていたそうだが、姑として「気に入った嫁」ではなかったようである。

女学校を開校時の物心両面の協力者であった大石万吉氏の妻の覚書によると、

> 香川昌子は愷太郎の妹として明治 6 年さる年生まれ。嫁として東京に住す。十年余り夫婦生活を営むも姑と折り合わず夫とわかれて長門国に兄校長を尋ねてくる〔上田、1962：58〕

とある。

また、昌子自身が晩年、門下生の一人に「17、8 歳の頃結婚したことがある」とつぶやいたことがあるという。

1 年後に函館から、嫁、妻の座を自ら降り、画の道へ戻ることを書き残して、京都へ帰り、再び南画学校へ入った。

長幸は、明治 32 年 5 月、東京へ転勤し、結婚している。このことが昌子にも大きく影響したようで、彼女はまもなく画業から離れ、明治 32 年 4 月、新築の藤山村立尋常高等小学校の校長に着任していた兄の愷太郎のもとへ身を寄せた〔宇部史編集委員会、1991：63〕。

当時の宇部は村で、旧藩時代は毛利藩の家老福原一万石の領地であった。江戸時代よりその地下の石炭の採掘が、製塩などの燃料として小規模に行われていた。明治 4 年、廃藩に際して、毛利藩撫育局は、それぞれの領地に更生資金を配分した。福原家にも配分があったが、家中のものはこれを分割しないで積み立て、英国留学から帰国した福原芳山が中心となり、石炭鉱区の採掘権を地元のために確保した。この積立金を元に、紀藤宗介ら 35 名の士族や大地主達は明治 19 年（1886)、共同義会を発足させ、宇部開発のため積極的な活動を始めた。採炭による利益は警察署、小・中学校、郵便局、図書館などの建築費に寄付した〔宇部史編集委員会、1993：23〕。

宇部の地下資源を、宇部の人間が掘りだし、その利益を郷里の公共のために当てるという考え方は、のちに宇部モンロー主義と呼ばれるに至る。

共同義会の会長に紀藤宗介が、副会長に藤田義輔が就任した。続いて共同義会がスポンサーとなり、達聰会を結成し村民の意思統一を図り、政治への強力な発言権を確保することになった。

寒村の宇部が、鉱業の町として人口も次第に増え始め、炭鉱も軌道に乗り、殺伐とし雑然とした時代に、昌子が宇部へ移ってきたことになる。彼女には長府の城下町の方がはるかに似合っていたようで、大洲の俤を求めて何度もここを訪れている。

彼女にとって、その後にも大きな影響があったエピソードとして、明治 34 年春、紀藤宗介琴峰よりの文人達の集いの夕べへ招待されたことである。琴峰は宇部一の地主で、県下に知られた歌人である。この時出席した客達の寄せ書きの中の牡丹の画は「一枝濃艶」と題する一幅とし、現在香川学園の所蔵として保存されている〔日野、2003：10〕。この頃の作品である浜部落の名和田家所蔵の松に牡丹の襖四面続きの大作は、牡丹を彩る朱色に女絵師芝香女史の情熱があふれ、面目躍如たるものが見られる。これを契機として紀藤宗介とその息子、閑之介のバックアップを受けるようになった。

年譜（その 1）

	歳	香川昌子	樋口一葉	時代の流れ
明治 5 (1872)	1	1 月 1 日 愛媛県喜多郡新谷村（現愛媛県大洲市新谷）に生れる。父行侃、母菊。	3 月 15 日（新暦 5 月 2 日）現東京都千代田区内幸町の東京府構内官舎に生れる。父則義、母滝子。	2 月 福沢諭吉『学問ノススメ』 5 月 東京師範学校創設 8 月「学制」公布 9 月 新橋･横浜間鉄道開通 12 月 太陽暦採用
	2	夏 家族とともに八幡浜に移る。		1 月 徴兵令公布 和算に代り、洋算の教授始まる
	3		則義、金融・不動産業を手がける。 6 月 妹くに誕生。	2 月 佐賀の乱 3 月 東京女子師範学校開校
	5			3 月 廃刀令 8 月 秩禄支給停止 9 月 札幌農学校開校 10 月 神風連の乱、秋月の乱、萩の乱
明治 10 (1877)	6		3 月 公立本郷学校入学 10 月 私立吉川学校に入学（小学読本、四書の素読）	2 月 西南戦争 4 月 東京大学開校 10 月 学習院開校
	7	春 八幡浜小学校入学（推定）	6 月 吉川学校 8 級を卒業、7 級に進級	
	8			9 月 教育令制定
	9			12 月 明治法律学校開校
	10		4 月 吉川学校を退学 11 月 下谷元黒門町の私立青海学校小学 2 級に入学	
明治 15 (1882)	11		5 月 青海小学 2 級を卒業 11 月 青海小学 1 級を卒業	7 月 東京女子師範学校に付属高等女学校を設置 10 月 東京専門学校（のちの早稲田大）創設

	歳	香川昌子	樋口一葉	時代の流れ
	12		12月23日 青海学校小学中等科第1級を一番で卒業。上への進学を断念する。	11月 鹿鳴館開館式
	13	春、浅井錦江に師事して、茶道、華道を学ぶ。	1月 和田重雄に和歌を習う。 松家政愛の妻に裁縫を習いはじめる。	6月 坪内逍遙『当世書生気質』 10月 東京大学ボート部隅田川で競漕会
	14			3月 萩野吟子(女医第1号)上野で開業 7月 『女学雑誌』創刊 松方デフレ政策ピーク 12月 伊藤内閣発足
	15	八幡浜小学校卒業、裁縫、手芸を習いはじめる。	8月 中島歌子の歌塾「萩の舎」に入門。和歌、書道を習う。	4月 師範学校令、小学校令、中学校令公布 宇部共同義会発足
明治20 (1887)	16	9月 尋常小学校授業生の免許をもらう。大洲の西村静一郎塾で漢文、数学を学ぶ（約2年間）。 11月17日 西宇和郡宮内村小学校に赴任。宮内村の佐々木家（父の実家）へ寄宿。	6月 父則義、警視庁退職。長兄泉太郎、大蔵省に就職。 12月 泉太郎（23）病没	1月 明治学院認可 二葉亭四迷『浮雲』
	17	4月21日 川之浜小学校へ転任。更に四ツ浜小学校へ転任。この頃高山長幸と知り合う。	9月 父則義、「荷車請負組合」事務総代	6月 田辺花圃『藪の鶯』
	18	田能村直入門下の女流画家橋本青江に八幡浜で会う。	父則義、事業に失敗。 7月 則義（60）病没	2月 大日本帝国憲法発布 7月 東海道本線全通
	19		5月「萩の舎」の内弟子となる。 9月 本郷区菊坂町に転居	1月 森鷗外『舞姫』 3月 東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大)創設 6月 佐渡で米騒動 7月 第1回衆議院議員選挙 10月 教育勅語発布 11月 第一回議会召集
	20	1月 四ツ浜小学校退職。 3月 大阪へ出て橋本青江門下となり、南画を学ぶ（約1年間）。	1月 小説「かれ尾花一もと」執筆、小説家として立つことを決意する。 4月 東京朝日新聞の小説記者、半井桃水宅を訪問。	9月 上野・青森間鉄道開通 10月 濃尾大地震（死者9700人） 11月 幸田露伴『五重塔』

	歳	香川昌子	樋口一葉	時代の流れ
明治25 (1892)	21	吉川笛村に師事し、南画、漢文、作詩を学ぶ（約1年間）。	3月 『武蔵野』創刊 4月「闇桜」、「五月雨」、「別れ霜」、「経づくえ」、「うもれ木」を発表。 6月 伊東夏子、中島歌子が桃水との交際について忠告。	5月 天然痘大流行（死者8400人）
	22	3月 藤田台石のもとで南画を学ぶ（約2年間）。 高山長幸が大阪へ赴任（三井銀行大阪支店）。	「暁日夜」、「雪の日」、「琴の音」を発表。 7月 下谷龍泉寺町へ転居。荒物、駄菓子屋を開く。 10月 上野図書館へ通う。	1月 文学雑誌『文学界』創刊 3月 郡司成忠大尉千島探検 6月 福島安正中佐シベリア横断 天然痘（死者1万8000人） 赤痢 （死者4万1000人）
	23	近藤南州に漢文、作詩を学ぶ（約2年間）。	「花ごもり」、「暗夜」、「大つごもり」発表 5月 本郷区丸山福山町へ転居。「花の舎」の助教となる。	7月 東京英和学校が青山学院に改称 8月 日清戦争開戦 電話交換嬢登場
	24	大阪より京都へ移り、田能村直入の南宗画学校入学。西田刺繍裁縫塾へ入る（約1年間）。	「たけくらべ」、「軒もる月」、「ゆく雲」、「うつせみ」、「にごりえ」、「十五夜」など発表。上田敏、河山眉山らが来訪。	1月 高等女学校規定公布 4月 日清講和条約
	25	3月 母菊、八幡浜で病死。 4月 高山長幸、三井銀行函館支店長として赴任。その後を追い函館市曙町3番地の社宅で同棲を始める。	「この子」、「わかれ道」、「あれから」など発表。 3月 肺結核発病。齋藤緑雨、三木竹二、幸田露伴ら来訪。 11月23日 肺結核のため没	6月 三陸地方大津波 （死者2万7000人）

年譜（その2）

	歳	香川昌子	時代の流れ
明治30 (1897)	26	春 函館より京都へ行き、再び京都南宗画の学校へ入り、7月同校卒業。	島崎藤村『若葉集』 尾崎紅葉『金色夜叉』
	27		11月 帝国婦人協会発足(下田歌子)
	28		2月 中学校令改正、実業学校令公布、高等女学校令公布
	29	師走頃、山口県厚狭郡藤山村の兄愷太郎のもとへ。	4月 与謝野鉄幹『明星』創刊 8月 小学校令改正 9月 女子英学塾開校（津田梅子）
	30	春、宇部村川上の紀藤琴峰家での文人墨客の集いに招かれた。 秋、琴峰の還暦祝いの扇面を描く。	5月 ウォール街 金融パニック 正岡子規『病床六尺』

	歳	香川昌子	時代の流れ
明治35 (1902)	31	2月1日 山口県厚狭郡立徳基高等女学校の嘱託となる(図画、漢文、習字、礼節科)。 4月1日 徳基高等女学校が県立に移管され、教諭心得となり、舎監を兼務する。	小学校の就学率90%
	32	3月 徳基高等女学校を退職 4月11日 藤山村藤曲、民家の一室を借り、香川裁縫女塾を開く。	10月 広島高等師範学校開校
	33	4月11日 新築校舎での授業を開始。 7月9日 香川裁縫女学校(山口県知事認可)校長となる。父行侃、伊予名取尋常小学校長を退職し、香川裁縫女学校へ着任。	2月 日露戦争開戦 9月 与謝野晶子「君死にたまふこと勿れ」(『明星』)
	34	香川裁縫女学校第1回卒業式(卒業生22名)	5月 日本海海戦
	35		「海老茶式部」流行
明治40 (1907)	36		1月 東京株式市場、大暴落 (日露戦争後の経済恐慌)
	37	高山長幸、衆議院議員当選	
大正2 (1913)	42		平塚らいてう『新しい女』
	43		7月 第一次世界大戦開戦
	44		12月 東京株式市場、暴騰 (「大戦景気」)
大正5 (1916)	45		12月 株式相場大暴落
	46	2月 香川実科女学校と改称	
	47		3月 スペイン風邪大流行(死者15万人) 7月 富山県で米騒動 8月 宇部で米騒動(村人口3万5000人)
	48		6月 ベルサイユ講和条約
	49	6月22日 父行侃没	4月 株価暴騰。 慶応大学早稲田大学、明治大学など私立大学設立認可
大正10 (1921)	50		11月 宇部村より宇部市へ(人口4万人)
	51		4月 生糸市場好転
	52		9月 関東大震災
	54		セーラー服流行
大正15 (1926)	55	2月9日 香川実科高等女学校(文部大臣認可)と改める。 皇太子行啓の際、山口県庁で単独拝謁の栄に浴す。	

	歳	香川昌子	時代の流れ
昭和2 (1927)	56	3月 修業年限を4ヵ年とする。校舎新築。	4月 銀行の取り付け騒動
	58		10月 ＮＹ株式市場大暴落（世界恐慌始まる）
昭和5 (1930)	59		3月 金子みすず（26）自殺
	60		7月 東京府初の女性小学校長誕生 （木内キヤウ） 9月 満州事変始まる 東北・北海道地方冷害
	63	創立30周年に同窓生寄付による記念謝恩教室（2階建て、103坪5合）落成。 秋富久太郎より、校門及び付属一切の寄付をうけた。	
昭和11 (1936)	65	3月 山口県香川高等女学校（文部大臣認可）へ改組昇格し、校長兼教諭となる。	
	66	1月19日 高山長幸（71）没	7月 日中戦争開戦 10月 中原中也（30）没
	67	11月 山口県香川高等女学校後援会（紀藤閑之介会長）が発足。	
	68	設立経営を財団法人山口県香川高等女学校に変更し、香川昌子が理事長に就任。秋富久太郎からの寄贈金（3万円）を資金とし、秋富財団香川校助成会（紀藤閑之介会長）を発足した。 5月 藤山区上条への校舎の移転決定。	
昭和16 (1941)	70	11月 山口県香川高等女学校後援会（紀藤閑之介会長）が発足。 兄愷太郎没	12月 太平洋戦争開戦
	71	新校舎、家庭科教室、講堂の工事完了。 4月 新学期より本科（4ヵ年）12学級。 実科（2ヵ年）4学級、定員800名となる。 8月 台風により第1号館倒壊。	8月 西日本に台風 （死者891人、全壊3万3283戸）
	72	6月 香川高等女学校内に藤山幼稚園を設置。 7月 新校舎の一隅に住宅を新築した。	
昭和20 (1945)	74		8月 第二次世界大戦終戦
	75		10月 男女共学実施を指示（文部省）
	76	4月 中学校を併設（9学級、定員450名）	3月 教育基本法・学校教育法公布。 6・3・3・4制、男女共学始まる。

	歳	香川昌子	時代の流れ
	77	4月 新学制施行により、香川学園高等学校を設置（普通科3学級、150名、家政科6学級、300名）。 11月 創立45周年記念として、香川昌子像（河内山賢祐制作）が同窓会より贈呈された。	4月 新制高等学校スタート
昭和25 (1950)	79	45周年記念事業として、同窓生の寄付による作法室竣工。	
	80	11月 宇部市長より宇部市制30周年記念式典で、教育功労者の表彰された。また、山口県知事より、多年教育振興発展に尽くした功績により表彰された。	7月 足立区に夜間中学。
	81	5月 内閣より藍綬褒章(教育功労者)受章。	
昭和28 (1953)	82	10月 創立五十周年記念式典挙行。記念事業として、講堂の拡張、家庭科特別教室を新築した。 12月17日 香川昌子没（行年82歳） 12月23日 校葬	

3 校長 香川昌子の誕生

明治35年（1902）2月、船木町にある厚狭郡立徳基高等女学校の図画、漢文、習字、礼節科の教師になった。彼女31歳。この年の4月、高等女学校は県立に移管された。昌子は教諭心得となり、舎監を兼ねることになった（教諭心得、月17円、舎監3円)。県立学校になったとはいえ、絵についてはプロである。教諭心得で彼女のプライドが許したであろうか。

しかしながら、安定した職を辞め、自分で塾を開くそのエネルギーはどこからきたのか。高等女学校を辞めるいきさつについて、校長や同僚との軋轢説や、文部省派遣の講師による図画講習会開催などが、画家芝香の憤懣を募らせた説など伝えられている。実力よりも出身校や肩書きが大切な官僚のやり方に自尊心が痛く傷つけられたことは、想像にかたくない。

傷心の彼女を支えたのは兄の愷太郎とその妻イサホである。イサホの兄大宅伊敏（船木裁判所判事）は愷太郎と松山師範学校の同級生であり、愷太郎の宇部への移住に大きな役割を果たしている。イサホは家事の暇に近所の娘達に裁縫を教えていた。ここへ昌子の才能の生きる場所をと配慮し、提供した。

> 明治36年4月、当部落の二、三有志の御後援により、この近隣の民屋を借り受け、裁縫手芸などの講習所を設立したのが起源であります。
> 私は県立徳基高等女学校に奉職いたしてをりましたが、私自身においても、地方女子教育の状態につきいささか感じるところがありまして、かく決意した次第であります。(香川高等女学校創立30周年記念式典式辞)

22名の塾生で始めた裁縫塾は、翌年37年7月、私立裁縫女学校となり、9月付で私立香川裁縫女学校の校主の認可がおりた。また同12月3日付で、文部大臣久保田譲より、香川マサは修身・算術・裁縫・手芸科教員の認可、行侃は修身・國語・家事科教員の認可が下付された。それまで、父行侃は愛媛県西宇和郡名取尋常小学校訓導兼校長であったが、娘の学校を手伝うことになった。

> ･･･父子二人をもって出発したのであったが、開校の年も暮れんとする
> 師走に入って暫く免許状は下付せられた。辞令に見入る香川（昌子）
> 校長の興奮を隠すことはできなかった〔平中、1965：4〕。

生徒の数も少しずつ増え、大正6年（1917)、香川裁縫女学校は香川実科女学校に改められた。しかし、生徒数が増えるのは大正12年からで、当時、本科77名、高等専修科15名、専修科1名、計102名となり、やっとそれまでの2倍近くとなった。

大正15年（1926）2月、香川実科女学校は文部大臣認可による香川実科高等女学校へ改められた。修業年限も4ヵ年となった。学校の規模が大きくなるにつれ、教育と学校経営をすべて1人でまとめることは極めて困難となった。56歳の昌子を支えたのは兄、愷太郎であった。夜遅くまで、兄妹が甲高い声で相談している様子が親族の間に伝わっている。彼女は終生、伊予弁が抜けなかった。

後継者のこともあり、学校の運営に昌子は甥や姪たちに望みをかけたが、血がつながるだけにかえって色々と思惑が交錯し、解決は容易でなかったようである。これらの経緯については、上田芳江の詳細な記載を参照されたい〔上田、1962：128〕。

「学校は香川昌子の所有物ではない」というのが、彼女の到達した結論である。

昭和9年（1934)、創立30周年を記念して卒業生の寄付により二階建て103坪の新築校舎が完成した。また地元の素封家秋富久太郎より校門などの寄贈があった。

昭和11年（1936）11月、山口県香川高等女学校後援会が組織され、紀藤閑之介が会長につく。昭和14年4月には設立経営者を財団法人山口県香川高等女学校に変更し、昌子は理事長に就任した。この頃より教育面は新造節三が担当するようになる。

新造節三は萩藩士河村藤太郎の5人の子どもの末子として生まれた。まもなく父が亡くなり、宇部村の宗隣禅寺へ8歳の秋、預けられた。高等小学校を経て、村立宇部中学校へ入学。ついで旧制山口高校文科甲類を経て、昭和3年、東京帝国大学文学部へ入学。昭和6年には大学院へ進学し、唯識学の研究をする。昭和7年、新造久子と結婚。昭和9年友人の世話で山口の野田高等女学校の教師となった。宇部育ちで教育の近代化に応えうる彼が、どうしても必要であり、昌子と愷太郎は熱意をもって説得した。彼もまた昌子の中に母親的な愛を見出したのだろう。昌子のもとで節三は教育だけでなく、次第に運営にもその手腕を発揮するようになる。

手狭になった校舎や施設を改善するため、寄付募金を始めるに当り、必要な書類には寄付金の募集従事者に、紀藤閑之介（71歳)、秋富久太郎（73歳)、香川昌子（68歳）ほか

30余名の名前がある。依頼状には「明治36年、裁縫塾創設以来、爾来年を閲すること、実に36年、其間（香川昌子）女史は総ての私財を傾倒し、身は赤貧に甘んじ（中略）」とあり、私財3万円を寄付したことが記述されている。彼女には学校が自分であり、自分が学校であった。

この計画は昭和14年5月具体化し、校舎を藤山区上条（現、香川高等学校の位置）に移築することを決め、校舎敷地の整備がはじまり、昭和17年1月、新校舎についで、家庭科教室、講堂の工事が完了し、本科（修業年限4ヵ年）12学級、実科（修業年限2ヵ年）4学級、定員800名の学校が完成した〔平中、1965：62〕。

昭和16年12月8日、第二次大戦が始まった。

昭和17年8月27日、宇部地方を70年に1度といわれる強い台風が襲った。近くの厚東川の堤防が決壊し、新築の校庭・校舎へ濁流が押し寄せ、棟上式を終えたばかりの第一号館は倒壊してしまった。

昭和20年4月の宇部市空襲で、講堂前に被弾し、「人命に異常なきも、建物その他に破片、爆風の被害」があった。昭和20年7月2日未明、宇部市街にB29、60機による空襲があり、焼夷弾により宇部市内の大半が焼失し、罹災者24,277名を数えた。生徒の死者2、生徒家屋消失94（内半焼4）であった〔平中、1965：85〕。70歳を過ぎた香川昌子は空襲の際は職員、生徒に守られて防空壕に避難しなければならなかった。

昭和20年8月、終戦後は、中学校は義務教育となったが、有料の私立中学校を併設することとなる。以後、学校拡大の時代を迎える。

昭和23年、創立45周年であり、昌子の喜寿のお祝いに、卒業生より寿像の贈呈を受けた。学校は新学制により香川学園高等学校と改称されることとなった。

新造節三教頭は、昌子を補佐し、新時代の学校の運営をゆるぎないものとする努力を続け、学園の充実が図られていく。

昭和27年（1952）、昌子81歳、教育功労者として藍綬褒章を受章。この頃より身体の衰えが進行しはじめる。

昭和28年（1953）10月23日、50周年記念式典が行われた。式典には卒業生に抱きかかえられるように式場へ入り、その姿に満場は興奮し感涙は止るところがなかった。式後、昌子は名誉園長となり、新造教頭の園長就任が発表された〔広沢、1983：96〕。

その後、衰弱はさらに進み、大好物の豆腐汁もかつお節のおじやにも食欲を見せなくなった。

昭和28年12月17日、午後6時、甥や姪などに看取られて静かに息をひきとった。

女流画家香川芝香、学校法人香川学園長香川昌子は82歳の女として教育者としての生涯を閉じた。

頌徳院聖恵慈光大姉

彼女の法名である。

4　小学校の成立とその後の動向

明治政府は文明開化を押し進め一気に近代列強の仲間入りを目指し、教育制度の確立を図る。明治5年（1872年）、大政官布告により、先進のフランスなどの学校制度を参考に義務教育として小学校を開校することとした。全国を8大学区に分け、各大学区を32中学区とし、この中学区を210小学区に分け、各区人口600人を単位に1小学校を開校するとした。

学制の目的は「邑ニ不学ノ戸ナク、家ニ不学ノ者ナカラシメン」ためで、男女とも6歳で小学校で就学させ、身分や男女の別なく身を立てる基礎として学問を修めさせることにした。

松本市の開智学校（重文）は明治9年に建築され、今日に当時の雰囲気をよく伝えているが、このような小学校の校舎は地元住民の負担で建設した。その資金集めにかなり難渋した地方も多かったようである。

宇部ではとりあえず、民家や寺院の本堂が教場として利用され、明治7、8年以降、篤志家の募金などもあり次第に校舎が完成していった。

校舎の建築費の負担の他に、学校は有料で、月2～50銭ばかりの授業料を払う必要があった。米1升5銭の時代である。また、当時は子どもが労働力の一端を担っていたことなどもあり、学校反対の一揆が起きた地方もある。

小学校開校により、江戸時代から長い間続いていた私塾である寺子屋は急速に廃止されていく。しかし、小学校が軌道に乗るまでのしばらくの間、府県当局の認定をうけた寺子屋が公立小学校の役割を分担することとなる。

昌子の父行侃は戸数10戸あまりの広瀬という部落の家塾の先生となり、明治8年（1875年）八幡浜の対岸にある矢野崎村向灘浦で家塾を開いた。これがのちに矢野崎小学校となり、さらに白浜小学校となった。

このような過渡期、行侃は小学校教育のハードとソフトの両面で貴重な役割を果たすことになる。

山口県では「家塾規則」（明治6年7月制定）により読書・習字・算術の三科目を授業することを記している。

学制発足当初の教師不足対策として短期間の教員養成がはかられた。例えば、寺子屋の師匠などを対象に、3ヶ月間の小学校の教科内容や教授法の講習を行った。

学制により開校した師範学校は、教員の養成と同時に小学校で使用する教科書の編纂に当る。師範学校の授業料は無料であり、優秀な教員の養成は国の重要な政策の一つで、師範学校の生徒については優遇されたが、反面厳しい規則が定められた。

小学校に責任者の教師を定め、その下に授業を担当する句読師（くとうし）をおき、句読師1人で児童30人ないし50人の1組を担当した。明治9年に教員の名称を改め、教師を訓導（くんどう）補、句読師は授業生と呼ぶこととした。その後、師範学校など教員養成系の学校の卒業生が各学

校に配属されるようになり、明治 11 年には訓導、訓導補、授業生、授業生補の 4 階級制となった。明治 19 年の「小学校教員免許規則」（文部省）では、試験合格者のみに資格を与え、授業生については県知事がその免許規則を制定し、「小学簡易科教員及び小学校授業生免許規則」で、17 歳以上の授業生検定試験に合格したものに授与した。

学制施行後、現状に合せて、つぎつぎと規則が変わり、大変煩雑ではあるが、このような流れの中で、昌子は小学校の先生となり、小学校中退の一葉は先生になりそこね、それが、それぞれの人生に光と影をもたらすこととなる。

明治 12 年 9 月、文部省は「学制」を廃止し、「教育令」を制定している。小学校の目的を「普通ノ教育ヲ児童ニ授ケル所」とし、学齢を 6 歳から 14 歳とし、小学校教育を 8 ヵ年とした。すなわち初等科 3 年、中等科 3 年、高等科 2 年である。

教育令による授業内容は次の通りである。

1．「読書・習字・算術・地理・歴史・修身等ノ初歩」
2．それぞれの土地の状況に応じて「罫画・唱歌・体操」「物理・生理・博物ノ大意」を加えることができる。
3．「殊ニ女子ノ為ニ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ」

明治 13 年に改正された教育令では、やむを得ない場合は、1 のうち地理と歴史を省くことはできるとした。明治も後期に入ると、修身の重要性が強調されるようになってくる。「読み、書き、そろばん」と修身が義務教育課程の必須科目であった。

小学校の就学率は地方により大分差があるが、明治 6 年で男子約 40%、女子約 18%で、平均して約 30%であった。当時の宇部地区のそれは約 20%であった。これをどのように理解するか。前述のように授業料が必要であったことと、子どもが一家の働き手の一員とされていたことや、女子に教育は不用との当時の風潮も大いに関係している。就学率は多少の変動はあるが、その後右肩上がりで明治 35 年以降、男女とも約 100%となった。産業革命の波は明治初年からとうとうとして流れ込み、一定以上の教育をうけた者は身分などとは関係なく社会に受け入れられることとなる。このことは就学率の向上と無関係ではない。

裁縫について一言追加すれば、明治の中流家庭の主婦達の生活意識を公約数的に理解できるものとして、国分操子が編集した「日用宝鑑貴女の鑑」が上げられる〔前田、1993：97〕。

> 裁縫は女子の身に取りては最も主要な士事（しごと）として、第一に知らざるべからざるものなり。若し之れを知らざるときは、貴賤貧富の差別なく、独り其身の不自由なるのみならず、父母舅姑に事ふるにも夫の世話をするにも、子弟を養ふにも、其の不便利に云うべからず。是れ学校の科目中にも裁縫科の設けある故なり。

当時、女子が裁縫をするのは自明の理であった。裁縫の得意な昌子、裁縫は上手ではな

かったが生活のため、やらざるを得なかった一葉の生きた時代があった。

以上、小学校の成立期の流れを追ってみた。地方においては、就学率が上らず、簡易小学校として修学年数を短縮したり、夜間学校を開くなどの方法がとられたところがある。

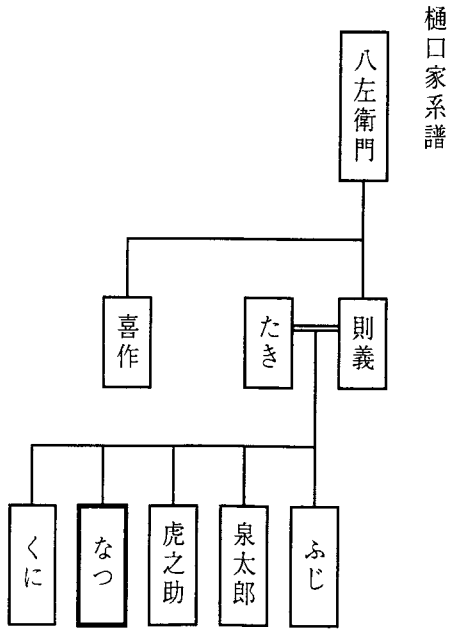
また、スタッフが不足がちで、校長席は空席とし、村長が兼務で代行していたところもあった。また入学しても欠席が多く、保護者に出席を督励する役をおき、就学の奨励、出席の督促をしたとの資料もある。

5　樋口なつ

樋口一葉については研究者も多く、数多くの資料がある。最近は孫、曾孫に当る世代の研究者の報告も目立ち、新しい視点での研究結果〔岩見、1996〕〔前田、1985、1993〕〔森、2001、2003〕〔菅、1999〕も目にするようになったことは、まことに喜ばしいことである。

まず、一葉の祖父八左衛門、父則義について若干述べたい。それは彼らが一葉の生き様に大きな影響を与えていると考えるからである。

八左衛門（享和２年、1802年生まれ）は、甲州中萩原村重郎原（現在の山梨県塩山市）の中農の生まれである。当時は天領で幕府（田安家）直轄の地であった。百姓であるが篤学の士で、和歌・狂歌・俳句・漢詩などをたしなむ教養人であった。百姓惣代として水争いの解決のため、江戸へおもむき、直訴に及び、そのため２ヶ月入牢させられたとのエピソードが示すごとく、面倒見がよく反骨精神旺盛な男であった。甲州人の典型といわれ、一葉にも多分にその傾向が認められる。



父、則義（天保元年 1829 年生まれ）は八左衛門の長男として生まれ、家業の百姓よりは学問が好きで、残っている書面を見るとなかなかの能筆家である。幼少時、近所の慈雲寺の寺子屋で抜群の才能を示している。同じ村の豪農古屋安兵衛の長女あやめ（のちにたき、滝、多喜とも）と恋仲となったが、彼女の親の反対にあい、八左衛門の友人で江戸で活躍中の真下専之丞を頼って家出をした。その時の旅費は八左衛門の蔵書を売却したり質入れしたりして用立てた。江戸時代、書籍は高価であり、四書五経の「四書」のセットが銀 55 匁（約 22 万円位か）〔磯田、2003：66〕であり、それを旅費の一部にあてたという。真下も重郎原の中農の出身で、江戸へ出て直参の侍となり、東京大学の前身である藩書調所の取調役となり、後に陸軍奉行にまでなっている。この真下の世話で藩書調所の小遣をスタートに、夫婦ともに骨惜しみせずに働き、慶応 3 年（1867 年）には南町奉行配下の八丁堀同心（浅井竹蔵）の株を入手し、その家督を相続している。藩書調所は現在の外務省情報局のような部署であり、ここでの勤務により、則義は早くから西洋事情に接することができたと思われる〔前田、1993：4〕〔岩見、1996：303〕。

しかし、出身出世の緒についたと思われたのも束の間、慶応 4 年（1868）、幕府は崩壊する。

幕府直参の侍の多くは将軍とともに静岡へ帰農したが、則義はそのまま新政府のもとで東京府の官吏となる。新制度での新しい行政システムの運用については官軍側の人間だけでは対応できず、幕府の実務家が採用されている。また、江戸詰の武士は一旦、それぞれの国元へ帰った。そのため東京の人口は一時半減している。則義はこの空家を地方より新政府へ着任の役人へ斡旋するなど不動産取引、金融業などのサイドビジネスにも手を出すようになり、これが成功し相当の財をなしている。

姉フジ、長兄泉太郎（仙太郎とも）、次兄虎之助についで、一葉（本名なつ、奈津、夏とも自署している。夏子は改まったときの署名に）は、明治 5 年 3 月 25 日（太陽暦では 5 月 2 日、明治 5 年暮で太陰暦から太陽暦へ）、東京府第二大区一小区内幸町一番屋敷、東京府構内長屋で生まれた。この大区小区制はまもなく廃止されている。東京府構内長屋は今でいう公務員宿舎である。現在の内幸町交叉点近くで、日比谷シティや日比谷公会堂の辺りにあたる。ついで、下谷練塀町ついで府布三河町へと自宅を購入して転居している。

明治 8 年（1875）、則義は東京府士族となるが、母たきは、この士族であることのプライドが非常に高く、一葉にもこの思いは一生つきまとった。一葉の 2 歳下の妹くに（国、国子、邦とも）には気風は薄いようである。このときの 2 年違いということは当時の世の中の移を反映しているのであろうか。

一葉は小柄で目鼻立ちのきりりとした美人であった。つつましやかであるが、正義感が強く、向上心が強いがやさしく、思いやりのある明治の女性である。また、このたびには女性ではじめて紙幣（5,000 円札）の顔となる。

明治 9 年（1876）、本郷 6 丁目 5 番地に家を買い求め転居した。ここは東京大学の赤門前の本郷通りをはさんで反対側にある浄土宗法真寺の門前の土地である（屋敷 233 坪、建

坪45坪で一部二階建て)。

本郷6丁目の家にいたのは満4歳から9歳までの5年3ヶ月である。家族は皆健康で、生活にも困窮することなく、平穏な時期であり、この時期が一葉にとって一番幸せな時期であった。

> 上杉の隣家は何宗かの御寺さまにて、寺内広々と桜桃いろいろ植わたしたれば、此方の二階より見下ろすに、雲はたなびく天上果に似て、腰ごろもの観音さま･･･ (雑記11)

妹くにによると一葉は3歳位までは大変なおしゃべりであり、兄達が新聞を読むのを口真似し、物覚えのよい活発な子どもであったという。

長兄泉太郎が小学校へ通学するようになり、それについて5歳で公立の本郷小学校に入るが、小柄で身体的にも無理があったのだろうか、すぐやめてしまう。当時、本郷小学校は文部省が重点をおいたモデル校の一つであったが、父則義は、教育レベルが低すぎると考えたようである。半年後に私立の吉川学校に入学した。ここでは文部省指定の「小学校読本」や、四書の素読などの授業を受けた。

一葉は幼少時より読書好きで、英雄豪傑の伝、仁侠義人の行為に喝采し、自分も男であったらと思ったらしい。

明治14年(1881)、御徒町へ転居する。現在のJR上野駅の東側あたりといわれている。ここより不忍池の端にあった私立青海(せいかい)学校へ通う。成績はいつもクラスで一番であったが、高等科第4級を卒業したところで、退学(明治16年12月)。

> 十二というとし学校をやめけるが、そは母君の意見にて、女子にながく学問をさせなんは、行々の為よろしからず。針仕事にも学ばせ、家事の見ならいなどさせん、とてなりき。

父則義も向学心の強い一葉に学校を続けさせたかったようであるが、母たきの意向に逆らえなかった。

> 死ぬばかりかなしかりしかど、学校は止(やめ)になりけり。(明治26年8月10日)

母親孝行な一葉は裁縫を習ったり家事にいそしむ。父則義は一葉に源氏物語、古今和歌集など、多くの古典を買い与えている。明治19年、父の友人の紹介で、小石川にあった、中島歌子が主催する歌塾「萩の舎」へ入門し、和歌や書道の修行をすることとなる。当時、歌塾は上流社会の子女の教養としてサロン的な存在であった。一葉を含め、数人以外はすべて旧藩主クラスや明治新政府の高官や貴族階級の子女ばかりであった。そこですぐに一葉は和歌の才能を示し始めるが、当時、父則義存命中で経済的にかなり余裕があったものの、上級階級の令嬢達の中ではなかなかで、年1回のパーティーでの晴れ着などに強い引け目を感じている。

明治 20 年、明治法律学校を出て大蔵省に勤務を始めた長兄泉太郎が肺結核で死亡、次兄虎之助は薩摩焼きの絵付師として家を離れ、15 歳の一葉が一家の戸主としての重荷がかかるようになった。これにより結婚の制限が生じたこともあるが、ほとんどの女性が父や夫の庇護のもとで生きた時代に、独身の一葉が男性に伍して一家を背負う厳しい生き方をなしたのだ。この時したたかに男性本位の社会を生き、見据えることができたことを、ポジティブに評価することができよう。明治 22 年、父則義は事業に失敗、失意のうちに死亡した。

明治 23 年、塾主中島歌子の計らいで、「萩の舎」の内弟子として働くことになる。中島歌子は江戸末期から明治にかけての激動期を生きた気概のある女性で和歌のみならず経営の才もあった。彼女は一葉を淑徳女学校の教師へなるように運動したが、学歴が小学校 4 年卒業では、無理であった。この頃になると、教える方の資質がいろいろチェックされるようになっていた。一葉も東京師範学校付属小学校の入学を試みたが、14 歳未満という修学規則のためにそれもかなわなかった。

「萩の舎」の 5 つ年上の先輩に田辺花圃（龍子）がいる。彼女は跡見塾、桜井女学校、明治女学校、東京高等女学校といった当時の名門校の 4 つで学んでおり、一葉とは違って、洋学やキリスト教の教養を身につけていた。彼女は明治 21 年（1888)、坪内逍遙の指導のもと言文一致体で書いた「薮の鶯」を出版した。その原稿料が 33 円であったと言うことが、一葉を大いに刺激した。

明治 24 年（1871)、4 月 15 日、友人の紹介で朝日新聞の連載小説を書いていた半井桃水を訪問。

> 君はとしの頃三十ばかりにやおわすらん。･･･色々と白く面ておだやかに少し笑み給えるさま誠に三歳の童子もなつくべくこそ覚ゆれ。

この日、一葉は夕食を御馳走になり、人力車で送ってもらっている。

新雑誌「武蔵野」創刊のことで桃水宅を訪問した折は、

> 雪ふらずはいたくご馳走をなす筈なりしが、この雪にては画餅（がべい）になりぬとて手づからしるこをたまえり（明治 25 年 2 月 4 日）

と、しるこを作って食べさせている。一葉は不用意にか桃水のことをまわりに話したりしており、掲句、師匠の中島歌子や親友の伊藤夏子よりも、桃水との間をきつく注意されている。

桃水との仲は一葉の片思いということで 1 年 2 ヶ月で終るが、この頃より生活が困窮を極めるようになる。

生活費に困り、着物の仕立てなどに励みつつ、方々から借金をしているが、それをさらに困っている知人に貸したり、金策の帰り、妹くにと義太夫節を聞きに行ったり、生活は逼迫していたが、精神的にはゆとりのある生活態度であった。

明治 25 年 10 月、一葉の両親の故郷にある「甲陽新報」(78 号～84 号、明治 25 年 10 月 18 日～25 日）へ「春日野しか子」名で小説「経づくえ」を発表。「甲陽新報」の主幹野尻現作は学生時代一葉の父の世話になっている。また、一流文芸誌「都の花」へ「うもれ木」を発表、好評であった。「うもれ木」には先輩である花圃の序文がついた。

明治 26 年 7 月より 9 ヶ月間、下谷竜泉寺町へ移り、ここで荒物と駄菓子を扱う小店を開いた。開店当初はかなりの売上げがあった。店は妹くににまかせ、上野にあった東京図書館へ通うようになる。当時の図書館は貸し出しをせず、閲覧だけで有料であった。なお、女性のためだけの閲覧室が図書館二階に設けられていた。ここで日本ではじめての女流職業小説家になるための実力を身につけることとなる。この竜泉寺町での生活の経験を自らの人生に重ね合わせて書かれた「たけくらべ」は森鷗外に絶賛され、一気に文名が上がった。

クリスチャンであり、西洋文学を学んでいた明治女学院の教師達による「文学界」のメンバー、すなわち、巖本善治、星野天知、馬場弧蝶、戸川秋骨、平田禿木、島崎藤村、北谷透谷、上田敏ら明治浪漫派の文学者達、同人との交流に一葉は新しい文学的気運を吸収していった。

明治 27 年、本郷の丸山福山町へ転居する。自宅を「文学界」仲間など訪れる客も増えていく。

「やみ夜」「大つごもり」「たけくらべ」「軒もる月」「ゆく雲」「わかれ道」「われから」など彼女の作品の大半が、その死までの 1 年余の間に書かれている。この短期間に書き上げられた作品の迫力には圧倒される。「奇跡の十四ヶ月」と呼ばれるゆえんである。

しかし、健康上の問題が生じてきた。肩こり、喉の痛み、発熱のため、明治 29 年 7 月より床につくようになった。一葉の容態を心配した齋藤緑雨は森鷗外を介して、当代一の名医といわれた、東京大学医学部教授で、その後、明治天皇の主治医を務めた青山胤通の診察を受けさせた。しかし、肺結核がすでに進行しており、妹くには心配して駆けつけた親友の伊藤夏子に「どうしてもだめなんですって」と説明した〔岩見、1996：135〕。

明治 29 年 11 月 23 日没。
法名は智相院釈妙葉信女

妹くにが保管していた一葉の日記が死後発表された。これにより一葉の恋焦がれた相手が半井桃水であることが明らかとなったし、欠けているところは妹くにの配慮であるとも言われている。この日記は、人間一葉の魅力の大きな源となっている。

6　明治の女のフロンティア精神

平成 15 年（2003）は香川学園は開学 100 周年に当る。また、平成 16 年は日露戦争開戦から 1 世紀となる。司馬遼太郎の「坂の上の雲」の主人公秋山好古、真之兄弟、正岡子規と同時代人である香川昌子について、時代の流れとそこで志を持ち続けた「女性」の生き

様を辿ることを思い立った。彼女の出生地である大洲市新谷地区、幼少時を過ごした八幡浜や、最初に勤務した宮内小学校、さらに佐田岬半島などを訪れたが、具体的な資料にめぐり合える筈もなかった。かって、彼女が目にした山や海を眺め、そこで暫くの間深い呼吸をするにとどまった。

香川学園60周年記念事業の折、香川昌子の伝記が出版された。その任に当った上田芳江は昌子の愛弟子の一人であり、才能豊かな文士である。その「香川昌子伝」(1962)に今加えるものはない。この伝記は「余りにも分明を欠く若き日の香川先生の御姿をとらえようとして、多く縁辺故旧を尋ね、藤花会(香川学園同窓会)の先輩に聴き、或いは先生自身の地、四国八幡浜に足を運ぶなど、文字通り寝食を忘れて寧日はなく、先生に対する敬慕の情は倦む事を知らぬ努力の集積と成り、弥々文士的感覚を文士魂を発揮して」完成したものである〔新造節三、上田の「香川昌子伝」の序文〕。

一葉は、明治5年に設置された小学校を4年で中退し、そのため学校の先生の職につくことができず、貧困の中で、日本で初めてのプロの女流小説家を目指し、若くして亡くなった。明治の女性として個の自立を目指した先駆者として記憶される。

昌子は希望に満ちた小学校教師も一枚の辞令で次々と勤務校を変えられ、また、親しくしていた高山長幸の影響も強く、明治の変動期をいかに生きていくか、平凡で堅実なだけの教師の生活に日々を送ることはできなかった。そのための自己の完成を画業の世界に求めたいと考えたのであろう。

明治24年(1891)1月、20歳の昌子は四ツ浜小学校を辞めると、家族の反対をおして、大阪へ出て、女流の南画家橋本青江の門に入り、さらに京都へ移り、南宗画学校で学んだ。

女流画家の作品は床の間に掛けられないという考えが残っていた時代を反映してか、芝香女史の作品として残っているものの多くは扁額である。

その同時代女性として、上村松園(本名津禰)がいる。彼女は明治8年、京都に生まれた。誕生前に父が亡くなり、母に育てられている。幼少時より優れた画才を示し、明治20年、京都府画学校に入学。明治23年、第3回内国観業博覧会に出品した「四季美人図」が、来日中のイギリス、コンノート殿下の買い上げとなり、一躍、評判となった。明治26年より、漢学を学び始めている。一見、順風にのった人生に見えるが、未婚の母としての苦難など平坦ではなかった。彼女は古典文学に登場する女性に発想を得た作品が多いが、母親が亡くなって以降は明るい色彩で女性の美を内面からの深みで表現することに成功し、美人画のジャンルを確立、後に女性初の文化勲章受賞者となっている。「序の舞」は彼女の息子、松篁の妻がモデルであるが、明治の女性の美しさと凛とした品格を描き出している。

教育者としての吉岡弥生のことに少し触れよう。彼女は明治4年、遠洲土方村(現静岡県小笠郡大東町土方)の医者の家に生まれた。6歳で小学校に入学。全生徒中、女子は2人であった。14歳で卒業。当時の他の子どもと同様、裁縫を習っていたが、父宛に東京から送られてくる新聞で、2人の女性が医術開業試験に合格したとの記事を読み、医師になることを志す。父の許しを得て、18歳時上京し済生学舎に入学。19歳で、内務省医術開

業試験前期試験に合格し、21歳で後期試験も合格し、医籍登録をしている。理由は明らかではないが、その後、済生学舎が女子学生を一切受け入れない方針をとった。医師を目指す女性達のため、奔走するが解決せず、それならばと女性の医学校を設立することを決意した。明治 33 年、吉岡弥生 29 歳時のことである。長い間学校経営に苦労したが、明治45年東京女子医学専門学校、昭和26年東京女子医科大学と展開し、今日に至っている。

進路に大きな障害が存在する時、一心に正面からぶつかっていく、行動力に溢れた解決策をとるのも明治の女性パワーのパターンの一つであろうか。

職業的女流画家の道を自ら辞し、兄を頼って山口県へ移った昌子は、32歳の春、宇部の地に裁縫塾を開いた。明治36年4月11日のことである。日露戦争開戦の前年であり、地元の炭価は上昇し、売れ残りの石炭の滞備の山はすべて出荷され、世を上げて好景気の時であった。

一、　信義廉恥を重んじ、言語動作をつつしみ、軽兆浮華をいましめ、真摯もって事に従うべし。

一、　感情を統制し、克巳堅忍、よく恭謙貞順の徳を養成すべし。

この校訓は、まさに女大学であるが、昌子の生涯をかえりみると、昌子自らに課した規範のようにも感じられる。

1 人でも多くの生徒に学校へ来て欲しいとの信念から、在学生とともに、市内の小学校の校門に立って、進学をすすめた。炭鉱労働者の娘達への勧誘には特に力が入った。長期欠席の生徒の家へ行き、経済的な理由の場合は月謝免除などの気配りをしたという。

「女にこそ学問が必要なのだ」

と、教室の隅から隅まで彼女の気迫がこもった教育は、昌子の分身作りのための厳しい毎日であった。

父、行侃と兄、愷太郎は影に日向に彼女を支え続けた。

教育と同時に、学校経営の苦労も並大抵のものではなかった。しかし、彼女の反骨精神、直感力などが何度もの危機を乗り越えた。

小学校教師の安定した生活を自ら辞し、女流画家のための厳しい修業と高山長幸との愛に女性として生きた彩鮮やかな前半生があり、それに続いて教育者として、母親として厳しいが愛情溢れる時代があった。

昌子先生の明治、大正、昭和が過ぎた。

平成の今日、学園の将来の進路はわれわれが決めねばならぬ。

おわりに

一葉が最晩年日記に記した一節

しばし文机に頬づえつきておもへば、誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとて、そはすべき事かは

には、たんに無念さだけではなく、逆に彼女のしなやかでしたたかな心意気が感じ取れる。

昌子は男女平等も、男女同権も、すべて女であることを前提として、

何よりも先ず女であること

を女子教育の柱に置いた。

そこに至るまでの女流画家としての苦難の道の経験は、教育者香川昌子の不撓不屈の精神を醸成するために不可欠のものであった。

本稿は平成15年11月15日、学校法人香川学園創立100周年記念講演会での講演原稿に一部補筆したものである。

結びに、香川昌子先生の謦咳に接した藤花会の方々には原稿をまとめるために貴重なお話、有難いご意見をいただいた。

また、この機会にご親族の方々にお目にかかれたことで、著者の勝手な推論の一部が納得できるものとなりましたことなど、皆様に心からお礼を申し上げたい。

【文献】

荒井真治ほか編（1997），『20世紀年表』毎日新聞社.
日野綏彦ほか編（2003），『香川学園の百年』香川学園.
平中十郎編（1965），『香川学園六十年史』香川学園.
広沢道彦編（1983），『新造節三先生伝』香川学園.
一葉記念館（2003），『樋口一葉・資料目録』台東区立一葉記念館.
磯田道史（2003），『武士の家計簿「加賀藩御算用者」の幕末維新』新潮社.
岩見照代ほか編（1996），『樋口一葉辞典』おうふう.
菅聡子（1999），『時代と女と樋口一葉』NHK出版.
前田愛編（1985），『新潮日本文学アルバム樋口一葉』新潮社.
前田愛（1993），『樋口一葉の世界』平凡社.
森まゆみ（2001），『一葉の四季』岩波書店.
森まゆみ（2003），『こんにちは一葉さん明治・東京に生きた女性作家』日本放送出版会.
群ようこ（2002），『あるたみたいな明治の女』朝日出版社.
上田芳江（1962），『香川昌子伝』香川学園藤花会.
宇部史編集委員会（1991），『宇部史年表』宇部市.
宇部史編集委員会（1993），『宇部史通史篇下巻』宇部市.
宇野俊一ほか編（1997），『日本全史ジャパン・クロニック』講談社.